

# SEND サマースクールプログラム (チュラロンコーン大学/ハノイ国家大学) 2013年度(第1回) 実施報告書

森 真理子 (国際交流センター センター長・教授)

佐々木幸喜 (アジア研究教育ユニット [国際交流センター] 特定助教)





# 目 次

1. はじめに .....	1
2. SEND (Student Exchange – Nippon Discovery) プログラム .....	2
SEND について .....	2
交流活動としての位置づけ .....	2
事前取得推奨科目「日本語・日本文化演習」 .....	3
3. 広報活動 .....	4
各活動について .....	4
成果と課題 .....	4
4. 実施状況および実施体制 .....	6
5. 派遣前講座 .....	7
健康教育と安全教育 .....	7
語学講座と発表準備 .....	9
6. チュラロンコーン大学 サマースクール【8月25日～9月7日】 .....	11
研修を振り返って .....	12
募集要項 .....	13
研修日程 .....	16
参加者名簿 .....	17
受け入れ教員所感 .....	18
派遣学生報告 .....	20
7. ハノイ国家大学 サマースクール【9月8日～9月22日】 .....	25
研修を振り返って .....	26
募集要項 .....	27
研修日程 .....	30
参加者名簿 .....	31
受け入れ教員所感 .....	32
派遣学生報告 .....	34
8. 編集後記 .....	39



# 1. はじめに

国際交流センター長  
森 眞理子

平成 24 (2012) 年度より始まった世界展開力事業「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成」プロジェクトでは、文学研究科、経済学研究科、農学研究科、教育学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、経営管理大学院、東南アジア研究所、人文科学研究科、国際交流センターで構成されるアジア研究教育ユニットが母体となって、アセアン地域を中心とした次世代人材育成のための多様なプログラムを企画実施してきた。国際交流センターでも、平成 24 年度の準備期間を経て、平成 25 年度には夏期休暇中にタイ・ベトナムへ学部学生を派遣する運びとなった。



国際交流センターでは、タイ・ベトナムなどのアセアン諸国への SEND 学生派遣以前にも、この 3 年間に東アジア（中国・香港・台湾・韓国）への学生派遣、豪州への夏期・春期語学研修などのプログラムを実施してきた。SEND プログラムに向けて、これらの先行プログラムが経験として蓄積されていたことが、新しい試みを始める際の先行モデルとして大いに役立ったことを特記しなければならない。

このプログラムに申請、参加した京都大学の学生たちは、学部も学年も様々であり、初めて海外に出る学生や既にこれまでに短期間海外で過ごしたことがある学生など、動機も経験も多種多様で、短期派遣プログラムがごく普通の学部生の一つの海外留学経験として根付き始めていることを印象付けるものであった。

SEND プログラムの特徴は、日本人学生が海外の学生との協働学習を通して、日本語や日本文化を外からの視点で捉え、留学先の言語文化を吸収するとともに自国の文化を再発見することに大きな眼目がある。語学学習や実地研修のみではなく、送り出し大学と受け入れ大学が協働して最大の効果を上げるにはどうすればよいか、新しい教育活動を形にするにはどうすればよいかを考えることから準備が進められた。

そのためにまず、受け入れ先大学の先生方と留学前から密に連絡をとり、短期間の研修が有意義なものになるようにカリキュラムを組み立てていった。留学企画の段階からタイ・チュラロンコン大学のチョムナード先生、ベトナム・ハノイ国家大学外国語大学のトゥイ先生他のスタッフに一方ならぬお世話になった。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2 週間の短期留学を終え、帰国してきた学生と報告会で話をする機会があり、生き生きと経験を語る学生たちを見ていると、短期間ではあるが日本以外の文化の中に身を置くことで自分を開放させ、これまでとは異なる新たな経験が物を見る目を広く豊かなものに行っていることが伝わってくる。これらの経験をステップにして、彼らが次の世界へ飛躍していく可能性を感じた瞬間である。

短期派遣プログラム実施については、送り出し側の危機管理など、目に見えぬ支援体制があったことも忘れてはならない。多くの支援のもとに実施されたプログラムであるが、今振り返れば改善を要する点も多々交じっている。今後内容を一層充実させ、継続していくことによって、先行プログラムがモデルとして役立ったように、SEND プログラム自体が一つのモデルになり、さらに密度の濃い短期派遣プログラムとなっていくことが期待される。

プログラムの実施にあたり、ご協力いただいたすべての大学関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成 25 年 12 月

## 2. SEND (Student Exchange – Nippon Discovery) プログラム

### SEND について

---

京都大学では現在、「大学の世界展開力強化事業」として三つの事業が選定されている。その内、「大学の世界展開力強化事業～ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援～」\*1 に採択された事業が、「開かれた ASEAN + 6」による日本再発見—SEND\*2 を核とした国際連携人材育成」プロジェクトである。本事業の目的は、京都大学アジア研究教育ユニット\*3 を拠点に、外部の視点から日本社会を見つめ直し、日本を再発見する過程を経験することで、新たな視点による課題解決を提案できる、実践的知性を備えた人材を育成することにある。学生たちには諸活動を通して、相互の信頼感を醸成すること、また、現代アジアが抱える課題に学際的かつ国際的にアプローチする方法を習得し、現実認識を深化することが求められる。

#### ※1 「大学の世界展開力強化事業～ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援～」

文部科学省の事業の一つであり、世界に雄飛する日本として誇れる人材の育成を目指し、国際的な枠組みで、単位の相互認定や成績管理等の質の保証を図りながら、日本人学生の海外留学と外国人学生の戦略的受け入れを行う ASEAN の大学等との大学間交流の形成を行う事業に対して重点的に財政支援することを目的とする。

京都大学では本事業の実施にあたり、東南アジア諸国連合 (ASEAN) に東アジア、南アジア、オセアニアを加えた地域を「ASEAN + 6」と位置づけている。

#### ※2 SEND (Student Exchange – Nippon Discovery)

「日本人学生が留学先の現地の言語や文化を学習するとともに、現地の学校等での日本語指導支援や日本文化の照会活動を通じて、学生自身の異文化理解を促すことを海外留学の目的の一つとして位置づけ、将来、日本と留学先の国との架け橋となるエキスパート人材の育成を目指す取組」(独立行政法人日本学術振興会 HP) と定義される。

#### ※3 京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU : Kyoto University Asian Studies Unit)

平成 24 (2012) 年 12 月に設立され、京大内の 6 学部・研究科 (文、経済、教育、農、アジア・アフリカ地域研究研究科、経営管理大学院)、2 研究所 (人文科学研究科、東南アジア研究所)、そして国際交流センターが協働する学際的ネットワーク組織である。

### 交流活動としての位置づけ

---

本事業は、三つの段階により実施される。すなわち、学部生を主な対象とする「異文化交流教育」、大学院修士課程学生および学部 3・4 回生を対象とする「国際連携専門教育」、大学院博士課程学生を主な対象とする「国際連携研究指導」である。本報告書で扱う SEND サマースクールプログラムは、第一段階の「異文化交流教育」の一つとして位置づけられ、現地の大学生・高校生に短期集中形式で日本語と日本の社会と文化について教える「短期 SEND プログラム」に当たるものである。事業採択後 2 年目となった平成 25 (2013) 年度、国際交流推進機構 国際交流センターは KUASU との協働により、チュラロンコーン大学 (タイ) とハノイ国家大学 (外国語大学・人文社会科学大学/ベトナム) への学生派遣を実施した。いずれの受け入れ先も、日本語・日本文化あるいは日本学といった各分野において中心的役割を果たす大学である。派遣学生たちは、2 週間の研修で現地語・文化講座、実地研修の他、SEND プログラムの要である、現地の大学生との相互学習・共同発表を行った。

## 事前取得推奨科目「日本語・日本文化演習」

SENDに参加する学生には、派遣先で交流する人々に対して、日本語や日本文化、日本文学の諸相について、日本語あるいはそれ以外の言語でも紹介し説明することが求められる。その実践として国際交流推進機構国際交流センターでは、平成25(2013)年4月より「日本語・日本文化演習」(全学共通科目 拡大科目群/カルチャー一般科目:資料1)を開講した。本授業は国際交流推進機構教員が2名体制で担当するリレー形式であり、平成25年度は、前期をパリハワダナ教授と河上准教授が、後期を河合准教授と家本准教授がそれぞれ担当した。また、今年度のプログラム2件を引率した佐々木特定助教がコーディネーターとして調整に当たった。本授業の実践を経て、派遣学生が、自国の文化を違う角度から見つめ直し、再発見する機会を得ることも大いに期待される。

(資料1) 平成25年度「日本語・日本文化演習」シラバス  
(京都大学 OpenCourseWare HP 参照)

学期	前期/後期
時間	水1/火2
担当教員	森 真理子 (国際交流推進機構)
授業形態	演習
学年・対象	全回生
授業のテーマ	日本人学生、特に海外大学に短期留学を計画している学生が、留学先大学において日本語を教え、日本文化を紹介するなどの経験を通して、日本文化を再発見し、その過程を通してグローバルな視野に立った物の見方・考え方を養うことを目的とする。
レベル	Undergraduate
授業計画	<p>現在実施されている、日本学生の海外派遣推進 (SEND) プログラムの一環として、海外派遣先の大学で、日本語・日本文化を多面的に理解し紹介できることが要請されている。日本人であっても日本語や日本文化について深い理解をもって解説するためには、言語・文化に意識的に向き合わなければならない。本授業は、日本語や日本文化を意識的に捉え、深い理解に立って外国人と見方や考え方を共有できるよう、講義・実習・討議を交えて進めていく。本授業は国際交流推進機構教員によるリレー式講義・演習によって行われる。</p> <p>1. オリエンテーション      2. 非母語話者に対する日本語教授法解説 3. 日本語教授法実習          4. 多文化の中の日本文化講義 5. 日本文化に関するプレゼンテーション及び討議      6. まとめ</p> <p>海外留学を考える学生を優先するが、これまでとは異なる新しい視点で日本語・日本文化を考えてみようとする学生や留学生の受講も歓迎する。</p>
評価方法	出欠や課題、積極的参加態度などの平常点と期末試験を総合して評価する。
履修要件	特になし
教科書	ハンドアウト

### 3. 広報活動

SEND プログラムの周知を図るため、以下の通り広報活動を行った。

#### 各活動について

---

#### 1) パンフレット「留学支度—大学のプログラムで行く短期留学—」への掲載・配布（資料2）

国際交流推進機構（国際交流センター・国際企画連携部門）で実施する短期留学プログラムの一つとして、パンフレットに掲載した（「SEND 日本再発見プログラム」）。また、事前取得推奨科目である「日本語・日本文化演習」（前頁参照）の初回授業でも本冊子を受講学生に配布し、説明を行った。

#### 2) 説明会の開催・実施（資料3）

SEND プログラム説明会を平成 25（2013）年 6 月 5 日の昼休みに、国際交流センター KUINEP 講義室にて実施した。説明会では、プログラムの概要と日程、募集要項について説明を行った。また、平成 26（2014）年度以降の応募を呼びかけるため、東アジア圏超短期留学プログラム説明会「留学のススメ アジア留学説明会」（6 月 21 日／於：国際交流センター KUINEP 講義室）でも、新規の派遣プログラムとして紹介を行った。

#### 3) ホームページ（国際交流センター／KUASU）への掲載

国際交流センターならびに KUASU の HP <sup>\*4</sup> 掲載による周知に努めた。また、国際交流センター HP の当該箇所が KUASU の HP 閲覧者からも確認しやすいように、京都大学吉田地区学術研究支援室（URA 室：Kyoto University Research Administration Office）を通してリンクを貼り、利便性を図った。

#### ※ 4-1 国際交流センター HP の当該ページ

「イベントや重要なお知らせ＞SEND サマースクールプログラム（タイ・ベトナム）募集のお知らせ」

#### ※ 4-2 KUASU HP の当該ページ

「Home > 2013 年度派遣プログラム一覧 > 多言語現地研修」

#### 4) 派遣学生報告会の実施（資料4）

国際交流センターおよび留学生課の教職員を対象にしたタイ・ベトナム合同報告会（第1回）を、平成 25 年 10 月 7 日の 5 限後に実施した。全学対象の合同報告会（第2回）についても、平成 26 年度以降のプログラム告知と学生確保を想定し、平成 26 年 1 月 21 日に実施した。本報告会は二部構成とし、前半は教員によるプログラム説明、後半は派遣学生による研修報告を行った。

#### 成果と課題

---

参加の経緯を確認すると、応募学生の大半が、HP 閲覧をきっかけに応募していることが分かった（「応募申請書」参照）。平成 26 年度以降は上記 2 つの HP 以外にも、京大 HP への掲載も行い、学生へのさらなる広報、啓発に努める。



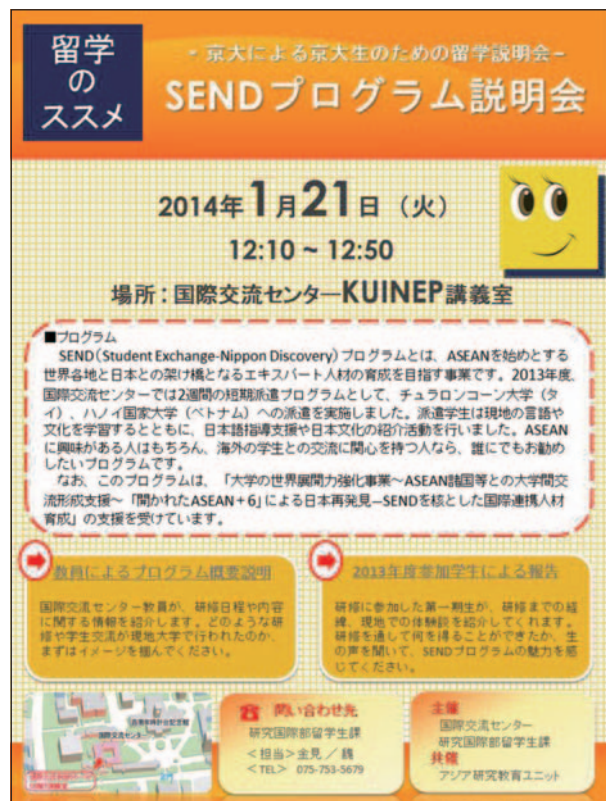
(資料2) パンフレット「留学支度—大学のプログラムで行く短期留学—」表紙および掲載箇所



(資料3) SEND プログラム説明会ポスター①



(資料4) SEND プログラム説明会ポスター②



## 4. 実施状況および実施体制

### 実施状況

	内容	期間	応募者数	参加者数	JASSO 奨学金
チュラロンコーン大学 (タイ)	タイ語・文化講義、 学生交流、実地研修、 発表討論	8月25日～ 9月7日 (2週間)	7名	5名 (学費補助+航空券代支給 +宿泊費支給5名)	1名
ハノイ国家大学 (ベトナム)	ベトナム語・文化講義、 学生交流、実地研修、 発表討論	9月8日～ 9月22日 (2週間)	13名	5名 (学費補助+航空券代支給 +宿泊費支給5名)	0名
合計			20名	10名	1名

### 実施体制

(敬称略)

#### ●チュラロンコーン大学

実施責任者・担当教員：

文学部計画・発展担当副学部長・

Chomnard SETISARN

文学部東洋言語学科日本語講座助教授

#### ●ハノイ国家大学

実施責任者・担当教員：

外国語大学東洋言語文化学部長・

Ngo Minh Thuy

京都大学－ベトナム国家大学ハノイ共同事務所長

人文社会科学大学東洋学部日本学科長

Phan Hai Linh

京都大学－ベトナム国家大学ハノイ共同事務所長・

新江 利彦 (Toshihiko SHINE)

京都大学国際交流推進機構・特定助教

#### ●京都大学

実施責任者：

学生担当理事・副学長

赤松 明彦 (Akihiko AKAMATSU)

国際交流推進機構長・教授

森 純一 (Junichi MORI)

国際交流センター長・教授

森 眞理子 (Mariko MORI)

担当教職員：

アジア研究教育ユニット・特定助教

佐々木幸喜 (Yuki SASAKI)

(国際交流センター付)

研究国際部留学生課教育支援掛

田中 京子 (Kyoko TANAKA)

金見 順子 (Yoriko KANAMI)

## 5. 派遣準備講座

ここでは、派遣前に行った取り組み「健康教育と安全教育」「語学講座と発表準備」について記す。なお、危機管理体制の整備の一環として、どちらのプログラムにおいても、緊急連絡網を受け入れ大学と協議しながら作成し共有している。

---

### 健康教育と安全教育

これは、学生が健康上の問題を抱えることなく海外短期留学プログラムに安全に参加できるように、事前に講義を中心とした取り組みを行うものである。本取り組みは、次の3つからなる。①留学前の安全および健康に関する事前教育、②出発前の自記式質問紙を用いた健康調査、③健康上にリスクがあり、ケアが必要と判断された学生に対する医師による面接。なお、帰国後にも②と③と同様の、健康調査と（必要に応じて）医師面接を実施した。

講義では、健康に関する内容と安全に関する内容を実施した。一般的に、海外留学や研修中に起こりうるリスクは、安全面のリスク、加害者（犯罪者）となるリスク、健康面のリスク、精神面のリスクの4つに分類される。本取り組みでは、健康面と精神面に関する講義を「健康とメンタルヘルスに関する講義」として、安全面と犯罪に関する講義を「安全教育」として2回に分けて実施した。安全教育では、留学中に起こりうる事故や災難、対応について説明し、海外で直面する様々なリスクについて改めて注意を喚起した。

#### ①留学前の安全および健康に関する事前教育（タイ・ベトナム2プログラム合同）

「健康とメンタルヘルスに関する講義」

6月26日（水）18:15-19:00 国際交流センター 多目的ホール

身体面のリスク 渡航前の準備 海外での健康管理	<ul style="list-style-type: none"><li>・持病のある人は、紹介状を作成してもらうこと</li><li>・固有の風土病—デング熱、チクングニア熱、寄生虫—について</li><li>・下痢が生じた場合の対応について</li><li>・病院の受診の仕方、救急時の対応</li></ul>
精神面のリスク メンタルヘルス	<ul style="list-style-type: none"><li>・短期の滞在で罹患しやすい疾患の特徴</li><li>・それらの疾患症状と、予防法について</li><li>・仲間の重要性</li><li>・禁止薬物には近づかないこと</li></ul>

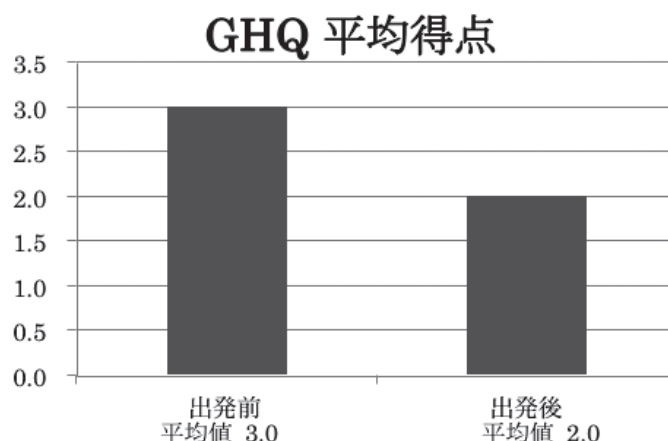
## 「安全教育」

8月7日（水）11：30 - 12：00 吉田国際交流会館 南講義室 5

安全面のリスク 被害者になるリスク	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 渡航先の治安、健康に関する情報を HP から事前に入手しておくこと</li><li>・ 外務省作成のビデオ「海外安全劇場」を供覧し、留意すべき点を再確認する</li><li>・ 事故や事件に遭った場合の緊急連絡先</li><li>・ 海外旅行保険の重要性</li></ul>
加害者になるリスク	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 日本人がしばしば巻き込まれる事例の紹介</li><li>・ 注意すべき行動について確認</li></ul>

### ②出発前の自記式質問紙を用いた健康調査

出発前のオリエンテーションの時間に、自記式の質問紙を配布し、記入を依頼した。留学後についても、同様に質問紙を配布し、帰国してから記入するよう依頼した。日本語版 GHQ60（General Health Questionnaire; 日本文化科学社）を用いて、その時点での精神的な健康状態を調査することと、既往歴の有無について確認するのが主な目的である。さらに、滞在先での適応度を予測するためにストレスコーピングなどの行動スタイルを測定する質問紙を併用した。質問紙は留学生課を通して回収した。



### ③健康上にリスクがあり、ケアが必要と判断された学生に対する医師による面接

GHQ60では、カットオフ値が17点と定められている。留学前と留学後に実施した健康調査において、そのような学生がいる場合は面接を行うと同時に、留学派遣コーディネーターの教員や職員と連携をとることにしているが、今回については、リスクが高いと判断される学生はおらず、面接は実施しなかった。

(国際交流センター 助教 川岸久也)

## 語学講座と発表準備

### 語学講座

---

#### 【チュラロンコーン大学派遣学生】

8月5日～9日の昼休みに、有志の留学生による語学講座を行った。本講座では主に、タイ文字や発音、声調、挨拶表現について学んだ。試験と重なり欠席した学生については、他の学生が講座内容をボイスレコーダーで録音し、情報共有に努める場面も見られた。

#### 【ハノイ国家大学派遣学生】

8月5日～9日の昼休みに、有志の留学生による語学講座を行った。本講座では主に、ベトナム語の発音、声調、挨拶表現について学んだ。試験と重なり欠席した学生については、他の学生が講座内容をボイスレコーダーで録音し、情報共有に努める場面も見られた。

### 発表準備

---

#### 【チュラロンコーン大学派遣学生】

7月19日、7月31日、8月8日、8月21日、8月23日の計5回行った。共同発表は、「日本文化入門」(担当:チュラロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座 Chomnard SETISARN 助教授)で行われることが5月24日の打ち合わせで決定していた。また、発表は1班あたり10名程度(チュラロンコーン大学学生9～11名程度、派遣学生1名)で行うことが決まっており、発表テーマや形式についての情報交換を、FacebookなどのSNSを通じて行わせた。派遣前の発表準備では、それらを踏まえ、資料収集やプレ発表に取り組んだ。

なお、発表タイトルについては以下の通り(当日発表順)。

- 1) なぜ日本の銭湯が減っているのか
- 2) なぜ日本の紙幣に天皇が描かれていないのか
- 3) 日本の方言・俗語について
- 4) 日本人とタイ人の名前の違いについて
- 5) 富士山はなぜ自然遺産ではなく文化遺産なのか



#### 【ハノイ国家大学派遣学生】

7月24日、8月9日、8月21日、8月22日の計4回行った。共同発表は、ハノイ国家大学の構成大学2校(人文社会科学大学、外国語大学)で行われることが3月18日の打ち合わせで決定していた。発表テーマ・形式については学生同士で話し合わせることにし、派遣学生は「日本の美意識」にちなんだ発表内容を練った。派遣前の発表準備では、それらを踏まえ、資料収集やプレ発表に取り組んだ。また派遣学生からは、伝統文化の理解をより深めるためにフィールドワーク(京町家見学・茶道体験・武道センター見学)を行った旨、報告を受けている。

なお、派遣学生の発表タイトルについては以下の通り(当日発表順)。

- 1) 茶道～日本人の考え方～
- 2) 枯山水からみる日本人の美意識
- 3) お弁当からみる日本の食
- 4) 日本語の中のオノマトペ～擬音語・擬態語の世界～
- 5) 合気道の精神

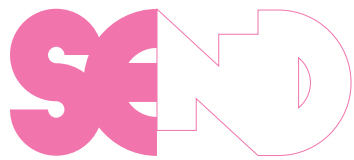


## 成果と課題

---

「健康教育と安全教育」については、すべての派遣学生に出席を義務づけた。受講態度は良好であった。また、国際交流推進機構（国際交流センター・国際企画連携部門）が実施する他プログラムと同様、海外旅行保険の加入を義務づけた。補償内容としては「救援・支援費用 無制限」プランに設定されたものを選択した。実際、研修中に体調不良を訴えた学生がいたが、保険会社の提携する病院に連絡を取り、比較的早い段階で受診することができた。

「語学講座」については、参加は任意としたが、出席率・受講態度ともに良好であった。また今回は派遣準備講座の一環として行ったが、派遣学生の多くが帰国後も語学学習を続けたいと話しており、学習意欲の高さが窺えた。京都大学に在籍するタイ人・ベトナム人留学生との交流の機会を増やすことが求められる。また、今年度は、有志の留学生に講師を依頼したが、来年度以降は謝金を支払ってチューターとして雇用する、あるいは研究科・研究所の開講講義への参加許可を打診することも視野に入れる必要があると考える。（佐々木幸喜）



チュラロンコーン大学 サマースクール  
8月25日 - 9月7日



## 6. チュラロンコーン大学サマースクール

### 研修を振り返って

---

#### 1) 研修内容

まず、語学講座、教室活動（聴講・共同参加）、実地研修それぞれの概要を説明する。

語学講座は、特別クラスの「Intensive タイ語」（媒介語：英語、タイ語）が組まれた。これはタイ語集中プログラムであり、派遣班全員がタイ語初学者であったため、今回は1クラスのみが開講となった。全7回（21時間）行われた本授業では、プログラム独自の教材が使用され、挨拶表現や日常会話といった実用的なものから文法など継続学習を想定したものまで、多岐に亘る内容が取り上げられた。

教室活動の内、聴講型は、京大生のみを対象とした特別講義が2回（5時間）開講され、BALAC<sup>※5</sup>が開講する「Thai Literature and Culture」を2回（6時間）聴講した。特別講義はChomnard SETISARN 助教授や京都大学大学院文学研究科出身の教員が担当され、タイの宗教・社会・文化に関する概説を学んだ。BALAC 講義は留学生を中心としたクラスで行われ、自己犠牲を素地とするタイ文学や文化の様相について学んだ。

共同参加型は、日本語講座の授業への参加が2回（6時間）と共同発表が3時間組まれた。日本語講座の授業は、日本語専攻や副専攻の学生対象としたものであり、派遣学生も彼らと共にロールプレイに参加するなどして、日本語表現の伝え方を学んだ。

語学、特別講義と組み合わせる形で、実地研修が2回実施された。アユタヤ時代から現在のラッタナーコシン時代までの歴史と伝統を知るため、古都アユタヤとラッタナーコシン歴史展示館を訪問した。

なお、移動には、BTS（スカイトレイン：Bangkok mass Transit System）や学内シャトルバス、タクシーを利用した。また、Chomnard 助教授の計らいで、チュラロンコーン大学学生が食事や携帯電話購入、観光に同行してくれたため、生活面における心理的な負担が軽減されると同時に、短期間で人間関係を深めることができた。

※5 BALAC：Bachelor of Arts Program in Language and Culture

京都大学国際教育プログラム（KUINPEP：Kyoto University International Education Program）に相当する。

#### 2) SEND としての取り組み

研修前の準備段階として、学生たちはSNS（Facebook など）による打ち合わせを、両大学の教員の指導の下行った。打ち合わせでは主に、資料の紹介や発表担当個所の確認に関する情報共有を行わせた。一時期、試験時期との兼ね合いから、情報のやりとりが滞りがちになることもあったが、京大側の試験が終了する8月中旬からは、連絡も再び活性化し、研修で両大学の学生が合流してからは、学内スペース（図書館・食堂）での打ち合わせに移行した。どの班も1回の打ち合わせに2～3時間かけており、また、打ち合わせ後は多くの班が食事に行くなどし、交流を図っていた。SNSを通して、打ち合わせ以外にも個人的なやりとりを行っていたことが功を奏したようである。打ち合わせの回数については、2日に1回の高頻度で打ち合わせを行う班があった一方で、10日間で2回程度の打ち合わせに留まった班もあった。これについては、事前準備の進捗状況によるものと思われる。



2週目の木曜日（9月5日）に、共同発表・討論を行った。学生たちは、1班あたり30分程度の発表時間を十分に使い、他の班にも分かりやすい発表を心がけていた。非常に質の高い共同発表を行った班もあったが、その一方で、調べ学習に留まってしまい、議論を発展させるまでに至らなかった班があったことも否めない。しかしながら質疑応答の際に、班員全員で迅速に意見を取りまとめる点はどの班にも共通しており、団結力の高さが窺えた。また、授業終了後も発表の内容を議論し合う場面が見られ、本発表における課題が一過性のものでないことを学生全員が意識していたようである。実際、SNSでの情報交換は継続しているという報告を派遣学生からも受けており、信頼関係が醸成されつつあるといえる。

### 3) 成果と課題

全体として、充実した研修を進めることができた。とりわけ、語学講座での取り組みが、タイ文化理解に対して積極性を持つ大きな契機となったようである。研修が進むにつれ、勉学、生活いずれにおいても課題を見つけ、それを自発的に解決しようとする姿勢が多く見られるようになった。

SENDについては、SNSによる打ち合わせの意義が大きかったことは言うまでもない。来年度以降についても引き続き行わせることとしたいが、より活発な議論を行わせる方法を探る必要もあるだろう。打ち合わせの重要性を伝える手立てとして、例えば、プログラム説明会での、派遣までの手続きや現地での生活の様子などの報告を派遣学生に行わせることが考えられる。その際に、充実した研修生活を送るためのアドバイスとして発言させることで、来年度以降の派遣学生への意識づけが可能になると考える。

本プログラムを実施する上で、現地教員との共同教育に関する密な連携が欠かせないこともまた明らかである。派遣学生が支障なく研修を行えるようにするため、また、受け入れ大学の関係教員の負担を最小限に留めるためにも、来年度以降も引率者（教員や研究員）が同行し、調整に当たる必要がある。  
(佐々木幸喜)

## 募集要項

---

説明会（6月5日開催）および留学生課での配布に加え、国際交流センターやKUASUのHPでも閲覧できるようにした。同様式のを次頁に掲載した。

## SEND プログラム

### 2013年タイ・チュラロンコーン大学サマースクールプログラムのご案内

#### 【日程】

- ・8月25日（日）チュラロンコーン大学（バンコク市）到着
- ・8月26日（月）オリエンテーション、タイ語・文化講座
- ・8月27日（火）～9月6日（金）タイ語・文化講座、日泰学生交流、実地研修、発表討論、修了式
- ・9月7日（土）帰国

#### 【詳細】

- ・募集人数：5名程度
- ・募集対象：京都大学に在籍する全学部生／  
修士課程学生（文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科）
- ・募集条件：異文化体験・学習に高い意識を持つ者
- ・費用詳細
  - 学費：約20,000円
  - 航空チケット代：約110,000円
  - 諸費用（国内移動費・教科書代・その他）：約30,000円～40,000円
  - 宿泊費：39,000円（3,000円×13日／大学近隣のホテル）
  - 海外旅行保険〔全員必須〕：約11,000円 ※AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」に加入すること  
（治療・救援費用無制限に設定）

#### ・補助金

以下のとおり各種支援を行います。

学費（約14,000円）：5名

航空チケット代（約110,000円）：5名

宿泊費（約26,000円）：5名

※ただし、参加決定後に取り消す場合はキャンセル料が発生します。

#### 【申し込み】

- ・申請書類：①応募申請書（書式1-1、短期派遣・単位取得プログラム）
  - ②語学力証明書（書式3、英語に関する記入のみで可）
  - ③語学試験（英語）を受験済みであればそのスコアコピー（提出自由）
  - ④申請にあたっての抱負（書式自由、A4用紙1枚程度）
  - ⑤成績証明書（締切時に提出できない場合はその旨を申し出ること）
  - ⑥パスポートの顔写真ページ写し（未取得者はその旨を申し出、早急に取得すること）
  - ⑦収入に関する証明書（JASSO奨学金申請用、応募申請書「書式1-1」3頁を参照のこと）
    - 給与所得者・・・源泉徴収票のコピー（税込み）
    - 給与所得以外・・・①確定申告を確定申告書の持参・郵送により行った場合
      - 確定申告書（第一表と第二表）（控）の写し（税務署の受付印があるもの）
      - ※税務署の受付印がないものは、加えて市区町村役場発行の「所得証明書」（有料）が必要
    - ②確定申告を電子申告により行った場合
      - 申告内容確認表の写し（受信通知又は即時通知を添付）

この奨学金を受給する学生は、帰国後に留学の学習成果に関する報告書の提出が義務づけられています。報告書が提出されない場合、もしくは不備がある場合、一旦支給された奨学金の全額返却が求められる場合もありますのでご注意ください。

※申請書類等は、以下の京都大学国際交流センターホームページからもダウンロード可能です。

<http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>

- ・ 申請書提出先：研究国際部留学生課教育支援掛 派遣プログラム担当 075-753-5679, 2488  
(吉田キャンパス旧石油化学教室1階 国際交流センター内)
- ・ 締切：2013年6月17日(月)17時00分
- ・ 選考：選考は書類審査および面接により行います。  
面接は6月20日(木)もしくは21日(金)の16時30分～18時00分に  
京都大学国際交流センター内で行います。
- ・ 最終結果通知：6月25日(火)17時00分
- ・ 本件照会先：  
国際交流センター 森 真理子  
佐々木幸喜 sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp  
研究国際部留学生課教育支援掛 金見 順子 kanami.yoriko.7n@kyoto-u.ac.jp

#### 【スケジュール】

- ・ 最終結果通知：6月25日(火)17時00分
- ・ 参加者オリエンテーション：6月26日(水)12時10分～13時00分  
(場所) 国際交流センター多目的ホール
- ・ ヘルスケア講義：6月26日(水)18時15分～19時15分  
(場所) 国際交流センター多目的ホール  
※オリエンテーションおよびヘルスケア講義は出席必須です。  
参加できない学生は本プログラムには参加できません。

#### 【備考】

- ・ 本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(前期：水曜1限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・ 本プログラム参加決定者については渡航前に、教員による語学力証明書(書式3と同一)の提出を求めます。
- ・ 本プログラムには引率教員が1名同行します。(ただし、一部日程と帰国時は学生のみでの行動です)
- ・ 本プログラムに参加しても、京都大学の単位になるわけではありません。
- ・ 全員に治療・救援費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。
- ・ 自然災害等その他事由により、プログラムが中止になることがあります。

## 研修日程

月日(曜)	時 間	日 程
8月25日(日)	11:45～15:35	出発(関西国際空港～スワンナプーム国際空港/TG623)、外貨両替
		ホテルチェックイン
8月26日(月)	09:00～10:00	オリエンテーション
	10:00～12:00	特別講義(タイ国紹介・タイ文化入門)
	13:00～16:00	キャンパス案内
	16:00～17:00	携帯電話購入
8月27日(火)	09:00～12:00	タイ語講座(1)[タイ語・英語]
	13:00～16:00	タイ語講座(2)
8月28日(水)	09:00～12:00	授業参加(Thai Literature and Culture)[英語]
	13:00～16:00	特別講義(タイの歴史と文化講座)
8月29日(木)	09:00～12:00	授業参加(観光日本語)
	午後	自由行動
8月30日(金)	09:00～12:00	タイ語講座(3)
	13:00～16:00	授業参加(日本語のコミュニケーションI)[タイ語・日本語]
8月31日(土)	終日	実地研修:アユタヤ遺跡、ワット・チャイワッタナラム(寺院)、日本人町跡、バンサイ民芸文化村[日本語・英語]
9月1日(日)	終日	自由行動 ※希望者のみバンコク最大のフリーマーケット「JJマーケット」へ。
9月2日(月)	09:00～12:00	タイ語講座(4)
	13:00～16:00	タイ語講座(5)
9月3日(火)	09:00～12:00	タイ語講座(6)
	12:00～16:00	実地研修(ラッタナーコシン歴史展示館)[英語]
9月4日(水)	09:00～12:00	授業参加(Thai Literature and Culture)
	13:00～16:00	自由行動
9月5日(木)	09:00～12:00	学生交流・発表討論・講評
	13:00～16:00	タイ語講座(7)
9月6日(金)	09:00～11:00	修了式
	11:00～13:00	日本語講座教員との懇親会
	14:00～16:00	引率教員講演
9月7日(土)	11:00～18:30	出発(スワンナプーム国際空港～関西国際空港/TG672)

参加者名簿

---

	番号	氏 名	所属	学年
班長	1	東 泰大 (Yasuhiro AZUMA)	経済	B3
	2	栽松 豪 (Go UEMATSU)	経済	B4
	3	北尾 亮太 (Ryota KITAO)	工	B2
副班長	4	炭井紗也佳 (Sayaka SUMII)	法	B5
	5	米山奈緒子 (Naoko YONEYAMA)	法	B4

ข้อคิดจากการจัดโปรแกรม “โรงเรียนฤดูร้อน” ในประเทศไทยเป็นครั้งแรก

ผู้ช่วยศาสตราจารย์ ดร.ชมนาด ศีตีสาร

สาขาวิชาภาษาญี่ปุ่น ภาควิชาภาษาตะวันออก คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย

ในช่วงวันที่ 26 สิงหาคม - 6 กันยายนที่ผ่านมา คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย โดยความร่วมมือของสาขาวิชาภาษาญี่ปุ่น ภาควิชาภาษาตะวันออกและศูนย์บริการวิชาการได้มีโอกาสต้อนรับคณะนักศึกษาระดับปริญญาตรีและอาจารย์ชาวชุกชี จากมหาวิทยาลัยเกียวโต ภายใต้โครงการที่เรียกกันสั้น ๆ ว่า “โรงเรียนฤดูร้อน” (Summer school) ซึ่งปีนี้จัดขึ้นเป็นครั้งแรก เนื้อหาส่วนใหญ่ของโครงการเน้นด้านการเรียนรู้ภาษาและวัฒนธรรมไทย นักศึกษาจึงต้องเรียนภาษาไทยเบื้องต้นแบบ intensive ในชั้นเรียนที่จัดขึ้นโดยเฉพาะ รับฟังการบรรยายพิเศษเป็นภาษาญี่ปุ่นเกี่ยวกับศาสนา สังคมและวัฒนธรรมของไทย เข้าฟังการบรรยายรายวิชา “Thai Literature and Culture” (ภาษาอังกฤษ) ในหลักสูตรภาษาและวัฒนธรรม (BALAC) ซึ่งเป็นหลักสูตรภาษาต่างประเทศของคณะ สังเกตการณ์การเรียนการสอนรายวิชาต่าง ๆ เดินทางไปทัศนศึกษาที่จังหวัดพระนครศรีอยุธยาและอาคารนิทรรศน์รัตนโกสินทร์เพื่อเรียนรู้เกี่ยวกับประวัติความเป็นมาและศิลปวัฒนธรรมไทยในสมัยอยุธยาจนถึงสมัยรัตนโกสินทร์ในปัจจุบัน นอกจากนี้นักศึกษายังต้องทำงานร่วมกับนิสิตชั้นปีที่ 2 ของสาขาวิชาภาษาญี่ปุ่นเพื่อทำรายงานกลุ่มในรายวิชา “ปริทัศน์วัฒนธรรมญี่ปุ่น” ในหัวข้อที่กำหนดกันเอง เพื่อนำเสนอในช่วงท้ายของโครงการ

ในฐานะผู้ประสานงาน “โรงเรียนฤดูร้อน” ฝ่ายไทย สิ่งที่น่าประทับใจเป็นอย่างมากคือ คณะนักศึกษามาจากมหาวิทยาลัยเกียวโตที่เข้าร่วมโครงการทุกคนมีความกระตือรือร้นและมีทัศนคติที่ดีเยี่ยมในการเปิดรับและเรียนรู้วัฒนธรรมใหม่ ๆ ทุกคนไม่เคยทำหน้าเบื่อหน่ายกับโปรแกรมการเรียนที่อัดแน่นจนแทบไม่มีเวลาส่วนตัว ไม่เคยมาสาย ไม่เคยบ่น ตรงกันข้ามกลับทำทุกอย่างด้วยความเต็มใจและจริงใจ มีการเตรียมข้อมูลมาเพื่อเข้าชั้นเรียนเป็นอย่างดี กล้าที่จะลองทำในสิ่งที่ไม่คุ้นเคย เช่น กล้าใช้ภาษาไทยที่เพิ่งเรียนมาในการสั่งอาหารกินเอง กล้าสื่อสารกับคนขับแท็กซี่ด้วยภาษาไทย ความกล้าในความหมายที่ดีเหล่านี้ผนวกกับความมีมนุษยสัมพันธ์อันดีทำให้ทุกคนสามารถผูกมิตรกับคนรอบตัวได้ในเวลาอันรวดเร็ว ทั้งกับคณาจารย์ผู้สอน เจ้าหน้าที่ผู้เกี่ยวข้อง นิสิตสาขาวิชาภาษาญี่ปุ่นที่ได้รับมอบหมายให้ช่วยเป็นพี่เลี้ยงในการใช้ชีวิตในจุฬาฯ และแน่นอนว่ากับนิสิตผู้ร่วมทำรายงานกลุ่มด้วยกันมาเป็นเวลาเกือบ 2 เดือนตั้งแต่ก่อนหน้าเดินทางมาประเทศไทย มิตรภาพส่วนบุคคลที่เกิดขึ้นน่าจะเป็นเป้าหมายสูงสุดและแท้จริงของการจัดโครงการลักษณะเช่นนี้ เพราะถึงแม้ผู้เข้าร่วมโครงการจะมีโอกาสได้มาเยือนประเทศไทยเป็นการส่วนตัว แต่ก็ไม่ได้หมายความว่ามีโอกาสได้พบปะแลกเปลี่ยนความคิดเห็นอย่างเป็นกันเองกับคนรุ่นราวคราวเดียวกัน หรือได้ทำความรู้จักกันอย่างรวดเร็วภายใต้สถานการณ์ที่เอื้ออำนวย ในทางตรงกันข้าม นิสิตชาวไทยเองก็ยินดีและกระตือรือร้นที่จะได้พูดคุยกับเจ้าของภาษา โดยเฉพาะนิสิตที่เรียนวิชาภาษาญี่ปุ่นเป็นวิชาโทซึ่งปกติจะมีโอกาสได้พบเจ้าของภาษาน้อยกว่านิสิตที่เรียนเป็นเอกหลังจากนักศึกษามาจากมหาวิทยาลัยเกียวโตเข้าร่วมสังเกตการณ์การเรียนการสอนรายวิชา “ภาษาญี่ปุ่นเพื่อการสื่อสาร 1” ซึ่งเป็นวิชาโท นิสิตชาวไทยแทบทุกคนเขียนแสดงความคิดเห็นในใบแสดงการเข้าชั้นเรียนว่า “เป็นชั่วโมงที่สนุกมาก” “เป็นครั้งแรกที่ได้คุยกับเพื่อนชาวญี่ปุ่น อยากให้มีเพื่อนชาวญี่ปุ่นมาพูดคุยแบบนี้อีก” ฯลฯ พร้อมทั้งแสดงให้เห็นในชั่วโมงต่อ ๆ มาว่า มีความตื่นตัวในการเรียนภาษาญี่ปุ่นเพิ่มขึ้นอย่างเห็นได้ชัด นับเป็นความสำเร็จอย่างยิ่งของโครงการที่ทั้งนักศึกษาและนิสิตของทั้งสองมหาวิทยาลัยจะได้เรียนรู้และได้รับแรงกระตุ้นใหม่ ๆ ไปด้วยกัน ไม่ใช่เป็นผลดีต่อเฉพาะฝ่ายใดฝ่ายหนึ่ง

ในศตวรรษที่ 21 ภาษาอังกฤษน่าจะยังมีบทบาทสำคัญในการสื่อสารมากขึ้น อย่างไรก็ตาม ในประเทศที่ไม่มีการใช้ภาษาอังกฤษเป็นภาษาราชการเช่นประเทศไทย การสื่อสารด้วยภาษานั้น ๆ ก็ยังคงสะดวกและจำเป็น ทั้งยังเป็นเครื่องมือที่มีประสิทธิภาพในการเข้าถึงวัฒนธรรมของประเทศนั้น ๆ ในความหมายดังกล่าว โปรแกรม “โรงเรียนฤดูร้อน” ซึ่งช่วยให้ผู้เข้าร่วมได้รับประสบการณ์ด้านภาษาและวัฒนธรรมไทยโดยตรง จึงน่าจะเป็นทางเลือกที่ดีในการเป็นพื้นฐานของการเชื่อมโยงสังคมญี่ปุ่นและไทยเข้าด้วยกันอย่างแน่นแฟ้นยิ่งขึ้นในอนาคต

## タイで初めて実施された「サマースクール」をふり返って

チュラロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座助教授  
チョムナード・シテイサン

去る8月26日～9月6日において、チュラロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座と同学部アカデミックサービス・センターの協力のもと、京都大学の学生5名と佐々木幸喜特定助教を迎えての短期学習プログラム、通称「サマースクール」が行われました。このプログラムの開催は今年が初めての試みで、タイ語とタイ文化の学習が主な狙いであるため、参加者の皆さんには、基礎タイ語を身につけるための特別クラスの「Intensive タイ語」が用意された他、日本語によるタイの宗教・社会・文化に関する特別講義や文学部のインターナショナルコースである Bachelor of Arts Program in Language and Culture (BALAC) の「Thai Literature and Culture」の受講、ならびに日本語講座のいくつかの授業を見学してもらいました。それだけでなく、アユタヤ時代から現在のラッタナーコシン時代までの歴史と伝統を知るため、古都アユタヤとラッタナーコシン歴史展示館の実地研修も含まれていました。さらには、プログラムの締めくくりとして、日本語専攻2年次の学生との共同研究による成果を「日本文化入門」という授業でも発表してもらいました。



「サマースクール」のタイ側のコーディネーターとして特に深く印象に残っているのは、京都大学の参加学生の皆さんの、新しい文化を学ぼうとする積極的で前向きな姿勢でした。プライベートな時間がないほどタイトなプログラムにもかかわらず、誰一人退屈そうな顔をしったり、遅刻したり、不平不満をもらしたりする者が居らず、反対にすべての日程を快くかつ真面目に取り組んでくれました。授業参加に当たっての入念なデータの準備、また習いたてのタイ語で料理を注文したり、タイ語でタクシーの運転手とのコミュニケーションを図ろうとしたりするなど、未経験のことに対するチャレンジ精神旺盛なところに大変好感が持たれました。その良い意味でのチャレンジ精神と人当たりの良さが、教員をはじめ、担当スタッフや案内役の日本語専攻の学生、さらには渡航の約2ヶ月も前から発表の打ち合わせを重ねていた学生たちと、短期間で容易に打ち解けさせた要因になったのではないかと推測されます。このような人と人のつながりこそが、このプログラムの最終にして本当の到達目標であると思われれます。なぜなら、今回の参加者の皆さんが、たとえタイを個人で訪れる機会があっても、恵まれた条件のもと、同世代のタイ人と交流ができ、しかもすぐに仲良くなれるとは限らないからです。一方、このプログラムはタイの学生、特に日本人と接する機会が日本語専攻学生より少ない副専攻学生にとっても大変有意義でありました。副専攻の授業である「日本語のコミュニケーションI」に京都大学の皆さんに参加してもらった結果、タイの学生が出席カードに「大変面白い授業だった」、「日本人の友だちと初めて話ができよかった。また来てほしい」などと一様に良い感想を書き、その後の授業においても学習意欲が一段と高まったようにも見受けられました。このように、どちらかのみプラスではなく、両校の学生にとって新しい刺激となったのは、この「サマースクール」の大きな成果ではなかったかと個人的に思います。

21世紀では、英語が以前にもましてあらゆるコミュニケーションにおいて重要な役割を果たすと思われれます。しかしながら、公用語として英語が使用されていないタイのような国では、現地の言葉がまだ便利でかつ必要であることもまた事実です。しかも、その国の文化を理解するのに有効な手段ともなっています。その意味では、タイ語とタイ文化を直接体験できる「サマースクール」プログラムは、今後の日本とタイ社会をより親密にする基盤を提供してくれる良い選択肢であると言えるでしょう。

東 泰大 (Yasuhiro AZUMA)

経済学部3年生



私はタイへ出発する前、大学生同士の国際交流について漠然とした印象しかありませんでした。しかし、今回のプロジェクトに参加し、現地の学生たちと議論をしたり、発表をしたり、学問や研究を通して交流を図れたことで、非常に充実した国際交流ができました。人種の違いは勿論、文化や価値観といったものを相対化したことで、日本についての再発見もありました。私は、大学で「タイ」という国は発展途上国で、生活水準はそれほど高くないと学んでいました。しかし

実地で見たと、富裕層の水準は日本と変わらず、貧困層との格差が日本以上に大きなものでした。ただ、タイにはそれを受け入れる寛容さがあるようでした。経済学について、これまでは指標や数値といった定量的な情報からのアプローチのみに着眼していましたが、文化や価値観といった定性的な情報を組み入れることも重要だと感じました。また、このプログラムでは、国際交流だけではなく、専門分野につながるような情報や経験を得ることができ、非常に実りの多いものとなりました。

今回のプログラム内容は、全体としては非常に満足のいくものでした。学習内容は、タイ語、タイ文化の歴史、日本語の講義がバランスよく盛り込まれていて、2週間という時間を考えると、分量、難易度ともにちょうどよいと感じました。アユタヤ見学やバンコク市内見学などの課外活動も、授業で習ったタイ語を実際に使うことで、タイ文化を肌で感じることができました。また、このプログラムの最大の魅力はチュラロンコン大学の学生たちととても仲良くなれることです。タイの人たちは日本人に親切で、特に大学生は日本の文化に精通していて、積極的にコミュニケーションを図ってくれました。2週間という短い滞在時間でしたが、多くの絆を築くことができ、このプログラムに大きな価値を見出すことができました。

さらに、このプログラムを通じて食文化や歴史、政治体制の違いといったものについてより深く学ぶことができました。タイは仏教国で、その価値観を日常の様々な場面で感じました。例えば施しをするという考えが、駅や道などの公共の場で現れていました。「困ったときはお互い様」という言葉が日本にはありますが、日本より倫理的・宗教的な観点から行われていて、その根底にある「自己犠牲」という仏教の精神を体感できました。さらにタイ文化の講義では、「自己犠牲」をテーマにしていたので、実際にチュラロンコン大学の先生の講義を聴くことで、学術的にも理解を深められました。

プログラム全体としては非常に満足のいくものでしたが、個々の専門に関する授業も受けられれば、なお白熱した議論を展開できたのではないかと思います。

今後の進路として、国際貢献を図れる場で活躍したいという思いが強くなりました。やはり文化や価値観の多様性に触れながら生活するかしないかで、毎日の発見には雲泥の差があります。困難も増えると思いますが、それ以上のやりがいや楽しさがあるでしょう。専門である開発経済学も活かし、インフラ整備を通して他国の経済成長に貢献できるような人物になりたいと思います。







今回、このサマースクールに応募した理由は、タイの大学生との交流を通して、彼らの考えを知り、自分の将来を考える上で刺激を得たいということでした。私は小さい頃から、海外に興味があり、大学に入ってからタイを旅行する機会が二度ありました。しかし今回は同世代の人との交流とタイ語やタイ文化の勉強を通して、旅行では得ることができないものを得ようとプログラムに参加

しました。このプログラムは、その目的を十分達成できるくらい密度の濃いものであったと思います。日本語専攻のタイの学生と接する機会がたくさんあり、お互いに積極的に関わることで、様々な場面でのタイと日本の違いに触れることができました。また日本文化について共同発表を行ったグループの人達とは、渡航前から SNS を通して発表に関するやりとりをしていたため、一緒に過ごした時間は短くても、親密な関係になれたと思っています。発表に向けた準備の段階において、日本に関して具体的な質問がたくさん出され、自分では当たり前と思っていたことについて疑問を持つことで、文化や習慣を考える際に新たな視点を得ることができました。また、出会った学生のほとんどが日本語専攻ということもあって、日本に留学に来る予定の学生も多くいました。これからも交流を続けられ、お互いの文化について自国で紹介できるということも、このプログラムの魅力であると思います。また、このプログラムでは、日本文化を紹介するだけでなく、タイについて以前にも増して興味を持つきっかけにもなりました。その要因としては、タイの言語や文化に関する講義を受けたことと、そこで出会ったタイの学生や先生方との交流によるところが大きいと思います。タイ語の講義は、基礎を重点的に扱ってくださり、教科書も体系的なもので、帰国後のタイ語学習継続を促してくれるものでした。またすぐに使える例文を教えてもらうことで、バンコクの街中で実際に使うこともできました。タイの文化に関しては、英語での講義への参加や、アユタヤへの実地見学によって、本で得る知識以上のものを、体験を通して得ることができました。また、今回出会ったチュラロンコーン大学の学生や講師の先生方は魅力的な方が多く、どこかタイ人特有の雰囲気のようなものがあるように思いました。雰囲気という抽象的なものしか掴めず、「交流を通して彼らの考えを知る」という点で具体性には欠けませんが、このプログラムのおかげで、もう一度タイを訪れたい、さらには機会があれば留学したいと思えたことで、私は十分に意義があったと思っています。



このプログラムに参加して、以前より持っていた、海外で働きたいという思いがより強いものになりました。また、今までは考えていなかった留学という選択肢も増えました。2週間ではありましたが、海外の大学に通うという経験は貴重なもので、チュラロンコーン大学の一学生として食堂でご飯を食べたり、図書館の地べたに座って話し合いをしたりという経験は、新鮮で今後の学生生活や留学を考える上でのよい刺激となりました。



今回のタイ研修は2週間という短い期間でしたが、とても刺激的で、有意義な時間となりました。そもそこのプログラムは、「異文化の人たちと交流することによって、日本について再発見しよう」というコンセプトがあり、現地の大学生と共同でプレゼンテーションをしたり、大学生が受けている授業に参加したりしました。私たちのグループは「日本人とタイ人の名前の違い」についてプレゼンテーションをしました。私たちは予め日本で調べ、準備をして行きました。しかしタイの学生たちはそれ以上の内容をしっかりと調べてきていて、目新しい内容に驚かされました。例えば日本人は一生名前を変えないのが普通ですが、タイ人はその時の運氣によって、しばしば役所に行って名前を変えるそうです。実際に一緒にプレゼンテーションをした学生の中にも名前を変えた人がいました。普通と思っていたことが実は普通ではないと感じたときでした。このことは日本にいて本などで読んでもなかなか実感がわかないことで、旅行でタイに行っても知ることができないことだと思います。実際に現地に行き共通の課題に関して議論し合い、その違いを肌身で感じることによって初めて得る経験でした。これは、このプログラムの良いところの一つだと思います。

もちろん勉強以外にも学ぶことはたくさんありました。基本的に授業が終わってからは自由行動だったので、その時間を使い現地の学生にタイを案内してもらいました。街に出ると大学構内とはまるで違い、雰囲気が変わりました。私たちがお世話になったチュラロンコーン大学はタイの中でもトップを争う大学で、比較的裕福な家庭の学生が多くいました。しかし一歩街に出るとまだまだ貧富の差が激しいと感じました。そしてもっと驚いたのが、現地には日系企業、日本食、日本製の商品、日本発のブランド、日本の漫画などがあちらこちらで見受けられたことです。特に漫画、アニメに関してはかなり人気があり、本屋に行くとき必ずといっていいほど特設のスペースがありました。ちなみに同じグループの学生たちの間ではAKB48が流行っているようで、詳しくすぎてついていけませんでした。また休日には、現地の学生にJJマーケットというところに連れて行ってもらいました。ここは食品店や土産物屋が集まっているマーケットで、観光にもお勧めの場所です。

今回の研修では様々なことを学びました。実際、私が思っていたタイのイメージとは全然違いました。今回は現地の学生を通してタイという国を知ることができたと思います。また同じアジアの地域に住んでいる人たちでもこれだけ文化の違いや価値観の違いがあるのだと思いましたそして将来は海外でも働きたいと考えている私にとっては、この「異文化の人々と時間を共有できたこと」はとても良かったと思います。今後もこのような機会があれば参加したいと考えています。今回お世話になった先生方には感謝しています。ありがとうございました。



今回のタイ SEND プログラムに参加し、多くのことを学び、刺激を受けるとともに、思うところが多くありました。まず、チュラロンコーン大学への訪問では、そこの学生と交流する中で、大学で学ぶことを単なる「学習」で終わらせてしまっは勿体ないと感じました。なぜなら、今回の交流先は文学部（東洋言語学科日本語講座）で、私たちが交流した多くの学科生が複数の外国語を日常会話レベル以上に習得し、将来それを生かせる職に就くと話していたからです。このことは現在の自分自身の学習内容を振り返る良い契機となりました。



また、このプログラムを通じ、国際理解の観点でも考えさせられました。それは、その国のことを本当に理解しようと思えば、何でも“日本だったら”と比較をするのではなく、その国の文化や習慣をそのまま受け入れようと試みるべきだということです。また、その国の言語をなるべく早く習得して使用することで、その国を根本から理解しようとするのも重要だと感じました。なぜなら、言語はその国の文化を象徴し、基礎となるものだからです。実際タイにおいて、授業で学習した単語や文章を極力使うようにすると、英語を使うときより皆が一層笑顔で好ましい対応をしてくれたように思います。

また、現地の学生が日本文化についてよく知っている一方、私は日本における有名なタイ文化について聞かれた際、全く答えられませんでした。そのことが非常に恥ずかしく、また申し訳なく感じられたので、交流するならば、少なくともお互いの文化を事前に理解しておく必要があるということを感じました。

プログラム内容について、タイ語研修・授業・現地学生との交流と発表・実地文化研修等、非常に均衡が取れていて満足できるものでした。実際に赴いて一番魅力的だと感じた点は、色々な場面で同大学の学生と交流ができたことです。共同発表を行う学生だけでなく、訪問中知り合った学生と一緒に昼食を楽しんだり、買い物に出掛けたり、プレゼントを交換し合ったりと、旅行で滞在するだけでは絶対にできない、貴重で刺激的な経験をすることができました。タイ語の授業でも、先生方が様々な工夫をしてくださり、楽しんで学ぶことができたと思います。ただ、現地で企画してくださったバンコク市内見学では、ワット・ポー等の有名な寺院に回ることができず少し残念でした。

今回の派遣を経て、先に述べたように、学科のほとんどの学生が複数の外国語を取得している現状を受け、2つしか外国語を習得していない私は、大変刺激を受けました。そのため、機会があれば次の留学中もしくは就職後に、英語以外の言語を実務レベルまで習得したいと考えるようになりました。また、同大学に留学中、ある日本人学生が、今後のタイの高成長を見越してこの国に来ることを選択したと話していて、やはりこれからは、さらに関心をアジア等新興国に向けておく必要があるということも感じました。



最後に、同行していただいた佐々木先生、現地でお世話になったチョムナード先生、また関係者の皆様には大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後もこのようなプログラムの継続と更なる発展を願っております。

今回のタイ研修は、私にとって初めての ASEAN 地域での滞在でした。応募時から、どのようなところなのか、少しドキドキしていました。東南アジアの中では先進国のタイですが、現地で見ると交通規則は減茶苦茶で、中心部から少し外れると衛生面もあまりよくなく、日本の住環境は非常に恵まれたものなのだと実感しました。

しかしそんなことより、もう一度タイに来たい、と思わせるものがありました。それはタイの人々の温かさです。タイの人にはどんな事や人も受け入れてくれる懐の深さがありました。店員さんは、単語だけをいくつか並べるたどたどしい私たちのタイ語を真剣に聞き、笑顔で応えて、時には正しい言葉や発音を教えてくれました。大学では、1日中観光地を案内してくれたり、食事や買い物に付き合ってくれたり、最後にお土産までくれたりと、ほんの少し関わっただけでも非常に深い関係を築くことができた友達がたくさんいます。本当に親切で優しい国でした。



このプログラムでは授業・実地研修・自由時間のバランスがよく、充実した2週間を過ごすことができました。タイ語やタイ文化など、様々な授業に参加させていただきましたが、最も印象に残っているのは、タイの学生10人の班に日本人1人が混じり、一緒にプレゼンテーションをした授業です。行く前から準備をし、現地で初対面の学生と話し合いもして、難しいこともたくさんありましたが、このような機会は学校のプログラムでしか経験できないものだと思います。プレゼンテーションについて先生からは厳しいご指摘をいただきましたが、それも良い思い出です。短期間の滞在にもかかわらず「生徒」として受け入れてくださったことに感謝するとともに、日本ではプレゼンテーションをする機会があまりないため、いい経験となりました。今後活かしたいと思っています。

また、学校の最寄駅付近で現地の学生がよく利用している多数の商業施設や、マーケット、お寺、ニューハーフショーなど、様々なところを観光し、遊びました。現地の先生や学生が案内してくれることも多く、自分達だけで観光旅行に行くより多くのことを知ることができました。

今回タイでお世話になった日本語専攻の学生達は、自分の学んでいる言語について、「少しでも喋りたい!」という非常に積極的な姿勢を持っていて、話していてとても楽しかったです。能力に

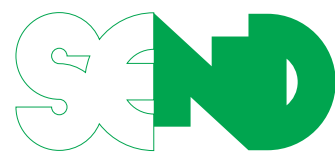


関係なく、「話したい! 学びたい!」という意識が大切だと実感しました。私は平成25年度に卒業予定のため、長期留学にはもう行けませんが、残りの学生生活では、これからの時代に必須の英語のプログラム等に積極的に参加して、英語力向上を図りたいと思っています。

今回このプログラムに参加することができて本当に良かったと思っています。このような素晴らしい機会をいただけたことに感謝するとともに、今回出会った良き友人と、タイの学生から改めて学んだ向上心の大切さ、この2つを忘れないでいたいと思います。



ハノイ国家大学 サマースクール  
9月8日 - 9月22日



## 7. ハノイ国家大学サマースクール

### 研修を振り返って

---

#### 1) 研修内容

ここでは、語学・文化講座、教室活動（共同参加）、実地研修それぞれの概要を説明する。

語学・文化講座は、8回（16時間）行われた。本講座では、テキスト2冊\*が教材として使用され、語学面では挨拶表現や日常会話といった実用的なものを、文化面では日本社会との相違点・共通点について学んだ。

共同参加型による教室活動は、外国語大学、人文社会科学大学、そして外国語大学付設の附属外国語英才高等学校で行われ、授業への参加が6回（11時間）と相互学習が2回（8時間）組まれた。授業への参加は、外国語大学と附属外国語英才高等学校での日本語クラスに合流する形で行われた。現地の高校生や大学生の日本語運用能力は、N4からN1までと様々であり、派遣学生は教員のアシスタントとして実際に授業を行ったり、また学生として彼らと共にロールプレイを行うなどして、日本語表現の伝え方を学んだ。

語学・文化講座と組み合わせる形で、実地研修が2回実施された。都市計画や社会問題については旧市街にて、都市部と農村部の違いや伝統工芸については工芸村にて研修を行った。

なお、移動にはタクシーを利用した。また、日本在住経験のある外国語大学学生1人が食事や観光に同行してくれたため、生活面における心理的な負担が軽減された。

#### ※使用テキスト

清水清明『世界の言語シリーズ4 ベトナム語』（平成23〔2011〕年3月、大阪大学出版会）  
Phan Văn Giưỡng 《Vietnamese For Beginners 1》（1990）

#### 2) SENDとしての取り組み

人文社会科学大学と外国語大学とで実施した。人文社会科学大学での発表形式について、学生たちはEメールによる打ち合わせを、両大学の教員の指導の下に行った。1週目の金曜日（9月13日）を相互学習の時間に当て、人文社会科学大学学生と京大生とが交互に自国の文化についてプレゼンテーションを行った。学生たちは、1人あたり20分程度の発表時間を十分に使い、他の参加者にも分かりやすい発表を心がけていた。中には、実物（日本：保存食の梅干し／ベトナム：伝統衣装の Áo Dài、伝統工芸の Đông Hồ 版画、旧正月の代表的な料理である Bánh Chung）を持参した発表者や実演（日本：合気道）を取り入れた発表者もあり、視覚的、味覚的にも文化理解を深めやすい発表となった。

外国語大学での発表形式については、派遣開始後、両大学の教員による打ち合わせを行った。2週目の金曜日（9月20日）を午前と午後の二部構成に分け、午前に京大生によるプレゼンテーションを、午後に外国語大学学生によるプレゼンテーションとグループディスカッションを行った。午前に発表を行った京大生は1週目での発表を踏まえ、時間配分や使用語彙の精査を行い、1人あたり15分程度の発表を行った。外国語大学からは、午前は2年次を中心とした学生（N2・N3程度）が約50人参加した。派遣学生の発表の後は、教員による略説（ベトナム語）を挟み、質疑応答（日本語）が行われた。午後は学生の入れ替わりがあり、3・4年次の学生が約40人参加した。午後の部の前半に発表を行った学生は、短期留学やホームステイを経験した3・4年次の学生であり、日

本滞在中に感じたベトナムと日本の文化的相違点を発表した。後半は、グループディスカッションを1時間程度設け、外国語大学学生7、8人と京大生1人がグループとなり、相互学習、発表を行った。発表テーマとして、「日本の食文化」「本音と建前」などが取り上げられ、活発に議論する姿が見られた。

### 3) 成果と課題

今回は外国語大学東洋言語文化学部（日本語部門）での受け入れが主となったため、ベトナムにおける日本文化理解は日本語教育を中心に深めることができた。来年度以降は人文社会科学大学での授業参加、また研究機関の社会科学院（ハノイ）との協働も視野に入れており、さらに充実した研修となるよう計画を進めることにしている。また、自由に使える時間が比較的多かったこともあり、休日には現地学生と共にハノイ民族学博物館に行き、ベトナムに住む民族の風習について学んだ。

SENDについては、インターネット環境の違いなどがあり、外国語大学との本格的な打ち合わせは派遣開始後に行われた。相互学習に際し、派遣学生の発表は日本語ではなく、英語で行うなどの対応をする場合も想定されるため、研修内容については特に打ち合わせを重ねることが求められる。

本プログラムを実施する上で、現地教員との共同教育に関する密な連携が欠かせないこともまた明らかである。派遣学生が支障なく研修を行えるようにするため、また、受け入れ大学の関係教員の負担を最小限に留めるためにも、来年度以降も引率者（教員や研究員）が同行し、調整に当たる必要がある。  
(佐々木幸喜)

## 募集要項

---

説明会（6月5日開催）および留学生課での配布に加え、国際交流センターやKUASUのHPでも閲覧できるようにした。同様式のを次頁に掲載した。

## SEND プログラム

### 2013 年ベトナム・ハノイ国家大学サマースクールプログラムのご案内

#### 【日程】

- ・ 9 月 8 日（日）ハノイ国家大学（ハノイ市）到着
- ・ 9 月 9 日（月）オリエンテーション、ベトナム語・文化講座
- ・ 9 月 10 日（火）～ 9 月 20 日（金）ベトナム語・文化講座、日越学生交流、実地研修、発表討論、修了式
- ・ 9 月 21 日（土）自由行動、出発
- ・ 9 月 22 日（日）帰国

#### 【詳細】

- ・ 募集人数：5 名程度
- ・ 募集対象：京都大学に在籍する全学部生／  
修士課程学生（文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科）
- ・ 募集条件：異文化体験・学習に高い意識を持つ者
- ・ 費用詳細
  - 学費：約 20,000 円
  - 航空チケット代：約 170,000 円
  - 諸費用（国内移動費・教科書代・その他）：約 30,000 円～ 40,000 円
  - 宿泊費：39,000 円（3,000 円× 13 日／大学近隣のホテル）
  - 海外旅行保険 [全員必須]：約 12,000 円 ※ AIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」に加入すること  
(治療・救援費用無制限に設定)

#### ・ 補助金

以下のとおり各種支援を行います。

学費（約 14,000 円）：5 名

航空チケット代（約 170,000 円）：5 名

宿泊費（約 26,000 円）：5 名

※ただし、決定後に参加を辞退する場合はキャンセル料が発生します。

#### 【申し込み】

- ・ 申請書類：①応募申請書（書式 1-1、短期派遣・単位取得プログラム）
  - ②語学力証明書（書式 3、英語に関する記入のみで可）
  - ③語学試験（英語）を受験済みであればそのスコアコピー（提出自由）
  - ④申請にあたっての抱負（書式自由、A4 用紙 1 枚程度）
  - ⑤成績証明書（締切時に提出できない場合はその旨を申し出ること）
  - ⑥パスポートの顔写真ページ写し（未取得者はその旨を申し出、早急に取得すること）
  - ⑦収入に関する証明書（JASSO 奨学金申請用、応募申請書「書式 1-1」3 頁を参照のこと）
    - 給与所得者・・・源泉徴収票のコピー（税込み）
    - 給与所得以外・・・①確定申告を確定申告書の持参・郵送により行った場合
      - 確定申告書（第一表と第二表）（控）の写し（税務署の受付印があるもの）
      - ※税務署の受付印がないものは、加えて市区町村役場発行の「所得証明書」（有料）が必要
    - ②確定申告を電子申告により行った場合
      - 申告内容確認表の写し（受信通知又は即時通知を添付）



この奨学金を受給する学生は、帰国後に留学の学習成果に関する報告書の提出が義務づけられています。報告書が提出されない場合、もしくは不備がある場合、一旦支給された奨学金の全額返却が求められる場合もありますのでご注意ください。

※申請書類等は、以下の京都大学国際交流センターホームページからもダウンロード可能です。

<http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>

- ・ 申請書提出先：研究国際部留学生課教育支援掛 派遣プログラム担当 075-753-5679, 2488  
(吉田キャンパス旧石油化学教室1階 国際交流センター内)
- ・ 締切：2013年6月17日(月)17時00分
- ・ 選考：選考は書類審査および面接により行います。  
面接は6月20日(木)もしくは21日(金)の16時30分～18時00分に  
京都大学国際交流センター内で行います。
- ・ 最終結果通知：6月25日(火)17時00分
- ・ 本件照会先：  
国際交流センター 森 真理子  
佐々木幸喜 sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp  
研究国際部留学生課教育支援掛 金見 順子 kanami.yoriko.7n@kyoto-u.ac.jp

#### 【スケジュール】

- ・ ヘルスケア講義：6月26日(水)18時15分～19時15分  
(場所) 国際交流センター多目的ホール
- ・ 参加者オリエンテーション：6月28日(金)12時10分～13時00分  
(場所) 国際交流センター多目的ホール  
※オリエンテーションおよびヘルスケア講義は出席必須です。  
参加できない学生は本プログラムには参加できません。

#### 【備考】

- ・ 本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(前期：水曜1限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・ 本プログラム参加決定者については渡航前に、教員による語学力証明書(書式3と同一)の提出を求めます。
- ・ 本プログラムには引率教員が1名同行します。(ただし、出発時は学生のみでの行動です)
- ・ 本プログラムに参加しても、京都大学の単位になるわけではありません。
- ・ 全員に治療・救援費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。
- ・ 自然災害等その他事由により、プログラムが中止になることがあります。

## 研修日程

月日(曜)	時 間	日 程
9月8日(日)	10:30～13:05	出発(関西国際空港～ノイバイ国際空港/VN331)、外貨両替
		携帯電話購入、ホテルチェックイン
	16:00～17:00	オリエンテーション
9月9日(月)	07:00～10:00	ベトナム語・文化講義(1)、キャンパス案内
	13:00～17:30	日本語スピーチコンテスト(主催:一般財団法人NASIC)参観
9月10日(火)	07:00～08:50	ベトナム語・文化講義(2)
	12:00～17:00	実地研修(タンロン遺跡、ハノイ旧市街)
9月11日(水)	07:00～08:50	ベトナム語・文化講義(3)
	09:20～10:00	日本語授業参加(ハノイ国家大学附属外国語英才高等学校2年生)
9月12日(木)	07:00～08:50	ベトナム語・文化講義(4)
	09:00～10:30	日本語授業参加(外国語大学3年生/読解)
	13:00～15:50	日本語授業参加(外国語大学2年生/会話)
9月13日(金)		<b>【ハノイ国家大学人文社会科学大学】</b>
	09:40～11:00	学生交流・発表討論
	13:30～16:00	学生交流・発表討論・講評
9月14日(土)	終日	自由行動
9月15日(日)	終日	自由行動
9月16日(月)	09:00～17:00	実地研修(バッチャン工芸村)
9月17日(火)	07:00～08:50	ベトナム語・文化講義(5)
	13:00～15:50	日本語授業参加(外国語英才高校1年生)
9月18日(水)	07:00～08:50	ベトナム語・文化講義(6)
	10:00～11:50	日本語授業参加(外国語大学3年生/会話・作文)
9月19日(木)	07:00～08:50	ベトナム語・文化講義(7)
	13:00～14:30	日本語授業参加(外国語大学1年生/総合日本語)
9月20日(金)	07:00～08:50	ベトナム語・文化講義(8)
	09:40～11:00	学生交流・発表討論
	13:30～16:00	学生交流・発表討論・講評
	16:00～17:00	修了式
9月21日(土)	終日	自由行動
9月22日(日)	00:05～06:40	出発(ノイバイ国際空港～関西国際空港/VN330)

参加者名簿

---

	番号	氏 名	所属	学年
副班長	1	加藤 菖子 (Shoko KATO)	法	B4
	2	清水 沙紀 (Saki SHIMIZU)	文	B3
	3	城谷 育子 (Ikuko SHIROTANI)	文	B3
班長	4	新城 拓海 (Takumi SHINJO)	法	B2
	5	三橋 亮太 (Ryota MITSUHASHI)	教育	B2

Thông điệp từ Khoa Ngôn ngữ và Văn hóa Phương Đông  
Trường Đại học Ngoại ngữ - Đại học Quốc gia Hà Nội

Trưởng Khoa Ngôn ngữ và Văn hóa Phương Đông,      Ngô Minh Thủy  
Trường Đại học Ngoại ngữ - Đại học Quốc gia Hà Nội

Phó Trưởng Khoa      Đào Thị Nga My  
Trưởng Bộ môn tiếng Nhật      Phạm Thị Thu Hà

Xin chào các thầy cô và các anh chị em sinh viên - Đại học Kyoto!

Chúng tôi rất vui đã có dịp trực tiếp giao lưu, tiếp xúc với sinh viên ĐH Kyoto qua chương trình giao lưu tại Đại học Quốc gia Hà Nội từ ngày 8 đến 22 tháng 9 năm 2013.

Thông qua Văn phòng hợp tác của Đại học Kyoto và Đại học Quốc gia Hà Nội (Vietnam National University, Hanoi – Kyoto University Collaboration Office - VKCO) được thành lập vào tháng 9 năm 2010, chúng tôi được biết Đại học Kyoto là trường đại học danh giá với những nhà giáo, nhà nghiên cứu thông thái, nơi đào tạo rất nhiều nhân tài. Và đến gần đây hai trường đã có dịp tổ chức giao lưu sinh viên, với các em sinh viên đến từ Đại học Ngoại ngữ đại diện cho Đại học Quốc gia Hà Nội. Ấn tượng của chúng tôi về sinh viên của Đại học Kyoto rất tốt, các em là những người ham học hỏi, có năng lực nhưng rất khiêm tốn và hòa đồng. Các em cũng rất hăng hái giao lưu trao đổi với sinh viên trường chúng tôi. Chương trình giao lưu tuy ngắn nhưng hi vọng các em sinh viên Đại học Kyoto đã tích lũy được những hiểu biết về tiếng Việt, văn hóa-xã hội và con người Việt Nam. Về phía sinh viên Việt Nam, qua các giờ học và buổi phát biểu tham luận cùng các bạn sinh viên Đại học Kyoto, các em cũng đã học hỏi được nhiều điều về ngôn ngữ, văn hóa-xã hội Nhật Bản.

Được trực tiếp tham gia chương trình từ khi mới bắt đầu bàn bạc kế hoạch với cán bộ giáo sư, giảng viên của Đại học Kyoto, chúng tôi thấy rằng Đại học Kyoto đã chuẩn bị cho chương trình một cách bài bản và hiệu quả. Chúng tôi cũng rất cảm phục những cố gắng hết mình của các thầy cô nhằm giúp sinh viên có những ngày học tập, giao lưu tại Việt Nam thực sự bổ ích.

Đại học Quốc gia Hà Nội nói chung và Trường Đại học Ngoại ngữ thuộc Đại học Quốc gia Hà Nội nói riêng cũng là một cơ quan giáo dục có uy tín. Chúng tôi rất coi trọng các mối quan hệ hợp tác quốc tế và đã thực hiện nhiều chương trình hợp tác với các cơ quan giáo dục Nhật Bản. Chúng tôi rất mong mối quan hệ hợp tác giữa Đại học Kyoto và Đại học Quốc gia Hà Nội sẽ phát triển hơn nữa để tiếp tục được đón nhiều sinh viên của Đại học Kyoto sang giao lưu, học tập tại Trường. Đặc biệt, trong lĩnh vực giao lưu sinh viên, chúng tôi hi vọng hai bên sẽ thực hiện được nhiều chương trình phong phú và ý nghĩa hơn nữa.

## ハノイ国家大学外国語大学東洋言語文化学部からのメッセージ

東洋言語文化学部長

副学部長

日本語部門長

ゴ・ミン・トゥイ

ダオ・ティー・ガー・ミー

ファム・ティー・トゥー・ハー



Ngô Minh Thủy  
(PGS.TS., Trưởng Khoa)



Đào Thị Nga My  
(ThS., Phó Trưởng Khoa)



Phạm Thị Thu Hà  
(ThS., Trưởng Bộ Môn tiếng Nhật)

京都大学の先生方、学生の皆さん、はじめまして。今回、ハノイ国家大学サマースクール（2013年9月8日～22日）を通じて、京都大学の学生の皆さんと直接交流することができ、大変うれしく思いました。

2010年9月の、「京都大学 - ベトナム国家大学ハノイ共同事務所」（VKCO：Vietnam National University, Hanoi-Kyoto University Collaboration Office）の開設を機に、ハノイ国家大学では、京都大学がいかに優れた教員・研究者を擁し、また、優秀な人材を輩出する大学であるかが広く知られるようになりました。このたび、ハノイ国家大学の直属機関の一つである外国語大学が中心となり、サマースクール実施にあたらせていただきました。京都大学の学生の皆さんについての印象は暖かく、素晴らしいものでした。好奇心旺盛で優秀な学生さんでありながら、いつも謙虚で、周りの人への気配りもしつつ、外国語大学の学生ともよく交流を行ってくれました。短い期間ではありましたが、今回の研修を通して、ベトナム語、ベトナム文化・社会、またベトナムの人々についての印象を心に留めておいてほしいと思います。また、今回の研修で京都大学の学生さんと交流した外国語大学の学生からは、一緒に参加した授業、共同発表等を通じて、言語・文化・社会といった日本の幅広い分野に関する勉強をすることができたという声が多くありました。

今回の研修実施に際し、京都大学の先生方と協力して計画を練ることができ、京都大学の先生方が賢明に効果的な準備を進めてくださっていたことが分かりました。さらに、学生のためにベトナムでの研修・交流プログラムを充実させようと尽力してくださった京都大学の先生方の熱心な姿を拝見して、感服いたしました。

ハノイ国家大学およびその直属機関の一つである外国語大学は、ベトナムにおいて影響力がある教育機関だといわれています。外国語大学では国際交流関係を重要視しており、その中でも特に日本の各教育機関との間で多くの協力プログラムを実施しています。今後とも、京都大学の学生の皆さんに外国語大学で交流や研修を行ってもらうことで、ハノイ国家大学と京都大学との協力関係がますます発展していくことを祈念しています。特に、両大学の学生の交流分野において、更なる有意義な交流プログラムを実施できることを期待しています。

加藤 菖子 (Shoko KATO)  
法学部 4 年生

サマースクールプログラムは、主に四つの要素によって構成されていました。ベトナム語・文化講座、学外における研修、日本語・日本文化を学ぶ現地の学生との交流、そして日越相互の学生による発表とディスカッションの四つです。基本的に、午前中は京都大学-ベトナム国家大学ハノイ共同事務所にて新江利彦所長の講義を受け、午後からはハノイ国家大学外国語大学や英才高等学校での授業に参加しました。実地研修においては、外国語大学の学生と共にハノイの旧市街などに赴き、ベトナムの歴史や文化を学びました。各週の最後には発表・交流会が行われ、日越双方の学生が発表を行い、文化の違いなどについてのディスカッションを行いました。研修中、急なスケジュール変更が幾度かあり、不安になることもありましたが、自由時間も適度に確保されており、均衡のとれたスケジュールだったと思います。



ベトナムでの日々は驚きの連続でしたが、まず驚いたのは、首都ハノイの様子でした。日本では考えられないほど多くの二輪車が車線という概念を無視して走り、歩行者は車の間を縫うように、信号のない横断歩道を渡っていました。大きなビルが立ち並び、一見成熟した都市のように見えますが、そのすぐ横には庶民的な市場や屋台が並んでいました。また、歩道に大きな穴が開いていたり、工事が中断された歩道橋の土台がそのまま残っていたりと、歩道や道路の整備不良も目立っていました。このような風景は、ベトナムの著しい発展とその課題の象徴として、強く印象づけられました。

このプログラムの要は現地の学生との交流にあると思います。異文化理解には積極性が重要であることは、本プログラムに参加する前から理解していたつもりでしたが、今回の研修で私はそれを本当に身に染みて感じることができました。それは、現地の学生の、日本語・日本文化を少しでも深く理解しようとする意志と努力を目の当たりにしたからです。私たちが関わった多くの学生は、私たち日本人と交流できる数少ない好機を活かそうと、日本語や日本文化に関するたくさんの質問をぶつけてきました。学生からの質問の中には、時に答えるのに戸惑ってしまうほど難しいものもありました。特に外国語大学の交流会で、日本人の「本音と建前」について批判的な意見を交えた質問を投げかけられたときには、答えに窮してしまいました。しかし、このような批判的な視点と素直な疑問をぶつける積極性こそ、異文化理解において真に必要なものだと感じました。このような気づきとそれを実践する機会を得たことこそ、本プログラムにおける最大の収穫であると感じています。また、彼らとの会話を通して、ベトナムについて知るだけでなく、私自身が日本語や日本文化について考えさせられたことも、良い経験でした。

本プログラムを通して、私は海外で働いてみたいという漠然とした思いを再確認することができただけでなく、より強固な決意へと昇華することができました。プログラム2日目に大学での日本語スピーチコンテストを観覧しましたが、ファイナリストの多くが、ベトナムのさらなる発展と成熟のために力を尽くしたいという思いを力強く表現する姿は感慨深いものでした。私は卒業後、アジア諸国での新規顧客開拓にも力を入れている企業に就職する予定ですが、現地に赴き、そこで働くことによって、それらの国の発展に何らかの形で関わっていきたいと思っています。



「ベトナムの学生に日本に来たいと思ってもらうこと」が、このプログラムを通して私が掲げていた目標でした。しかし、プログラムを終えた今では、「日本人にベトナムに対して関心を持ってもらうこと」を今後の課題としたいと考えています。

今回のプログラムでは、ベトナム・ハノイで2週間、文化体験や学生との交流を通じてベトナム文化を学び、さらに現地学生に日本文化や日本語を教える経験を通じて、日本の文化についての理解も深めました。

現地では、ほぼ毎日大学でベトナム語と文化の講義を受けました。相手によって呼び方を変える風習の奥深さや、6つの声調の発音の複雑さが印象的でした。特に心に残っているのは、2日目の課外授業で大学内や周辺を見て回りながら、ベトナムの文化的特性を教えていただいた時のことです。社会的立場が高い人ほどルールを守らないことや、盗難が頻繁に起こること、学生の安全より大学の景観が優先されていることなど、単なる観光では知り得ない事情も、実際に目の当たりにしながら教えていただきました。これは現地学習ならではの学びだと思います。



現地の大学生や高校生の日本語の授業にもアシスタントとして参加し、会話練習の相手になったり、日本語の発音をチェックしたりしました。自分の国の言葉でも、改めて人に教えることが意外にも難しいことを知りました。



また、交流会では事前に準備した日本文化のプレゼンテーションを行いました。私たちは「日本の美意識」をテーマに、5人それぞれが「武道」「茶道」「枯山水」「オノマトペ」「弁当」という題目で発表し、ベトナム人学生との質疑応答を通じてディスカッションをしました。ベトナム人学生からはベトナム文化の紹介や、日本を訪問した経験談などの発表があり、互いの文化について学び合いました。学外でも現地学生との交流があり、観光地や食事に一緒に行ったこともかけがえのない良い思い出です。

今回のプログラムを通して最も感じたのは日本語を学ぶベトナム人学生の熱意でした。学習した日本語でスピーチや討論をしたり、日本人である私達に積極的に話しかけたり、日本について興味津々に質問したりする姿が大変印象的でした。ベトナムの日本に対する友好精神を肌で感じたように思います。一方、自分の周りの日本人を考えると、ベトナムに対する知識も関心も薄いのではないかという気になりました。今回ベトナムで過ごして、日本人もベトナムについて関心を持ち、知識を深め、ベトナムから学びを得ることが、今後両国がさらに良い関係を築くために必要なのではないかと考えるようになりました。私自身、今後もこの国に対して関心を持ち、積極的に理解を深め、周囲の日本人に発信できるような存在になりたいと思います。将来は国際的な環境で働くことを志望しているので、このベトナムでの経験を活かしていきたいと考えています。自分の学習や進路を見つめ直すいい機会ともなりました。



反省点としては、気候や食べ物に慣れずに体調を崩す人が多かったので、知識に加えて、健康に対する参加者の意識を高めおくべきだと感じました。

余談ですが、帰国後現地で仲良くなった友達が日本に来てくれました。中には、京都にまで遊びに来てくれた人もいたので、私のこのプログラムでの目標はひとまず達成できたと思います。このような貴重な経験を本当にありがとうございました。



私は今まで、国際理解というと、ヨーロッパやアメリカといった「先進国」に目を向けがちでした。しかし今回「新興国」であるベトナムに2週間滞在することで、屋台やマーケットでの売買が盛んな国々の良さを感じることができました。日本ではあまり見られない、お店の人と客のやりとりに、心が温まりました。また、ベトナムでの2週間の滞在で、最も印象深いものは、交通に関することです。ベトナムは、バイクを中心に交通量が非常に多く、信号がほとんどありません。歩行者は道路を横断するときに、たくさんのバイクや車が走っている中を渡って行かなくてはなりません。この光景を目の当たりにしたときは、あまりの秩序のなさにただ驚くばかりでした。しかし、こういった環境に身を置くことで、日本の交通がいかに整備されているか、そして価値観の違いに気づかされました。日本には信号があって、交通ルールを守るのが当たり前ですが、ベトナムにはそもそも交通ルールというものほとんど存在しません。「当たり前」が違うという、日本にいただけでは気づきにくいことを肌で実感することができました。また、少年がおばあさんの手を握って道路を渡る、という光景を目にしました。この2人は見ず知らずの関係ですが、ベトナムではこういったことがよくあるそうです。このような点に、年上の人を敬うという儒教の精神が表れていて、素晴らしいなと感じました。

今回のプログラム内容は、大きく分けて3つありました。1つ目は、ベトナム語、ベトナム文化の学習です。ベトナム語では、人を呼ぶときに、その人が自分より年上か年下かによって呼び方が変わります。レストランなどで店員さんと呼ぶときに「あの人は自分より年上かな？」などと考えるながら呼んでいました。こういった点に、儒教の年上を敬う精神が見られ、文化と言語は非常に密接に関係しているのだな、と強く感じました。2つ目は、現地の大学や高校での日本語授業への参加です。現地の学生の会話の話し相手になったり、実際に前に立って授業を行ったりしました。日本語を教える立場になってみて、自分が「正しい日本語」を、自信を持って言えないことに気づきました。毎日使っている言葉なのに、まだまだ習得できていないと感じました。3つ目は、日本文化に関するプレゼンテーションです。私たちは「日本人の美意識」という大きなテーマを決め、その中で私は「枯山水からみるわびさびの精神」というテーマで発表をしました。「わびさび」を説明するには、どうしても専門用語が多くなってしまったため、語彙をコントロールして説明するというのは難しいものでした。テーマ自体が抽象的だったため、難易度の高い発表になってしまいましたが、少しでも「わびさびの精神」が伝えられたと満足しています。私は今まで、海外で働くということを全く考えたことがありませんでした。しかし、今回のプログラムを通して、「海外で日本をより知ってもらうために働きたい」と感じるようになりました。まだ漠然としていますが、これから本格化する就職活動を通して、具体的なビジョンにしていきたいと思います。

2週間のベトナムでの滞在は、プログラム内容からだけでなく、現地での生活からもたくさんのことを学ぶことができました。これからも、国際理解と同時に日本についてもさらに学んでいきたいと思っています。





異文化に対して、寛容であるべきとは頭の中で理解しているつもりでしたが、実際に他国の文化に接した際に寛容でいられるか、正直なところ自信がありませんでした。この不安を乗り越えようと決意し、このプログラムに応募したのが当初の動機です。海外の言語や文化を学び、またそれを通して日本について再発見をするという今回のプログラム趣旨は、まさにそうした私の思いを達成するのに最適だったと考えています。

何よりもまず驚いたのは交通量の多さでした。車の多い日本とは異なり、ベトナムではバイクが主に使用されていました。そのため必然的に交通量が増え、道路を横断するにも非常に困難を極めました。信号がないため、車やバイクの間を縫って進んでいくことになります。初めは、ただただ恐怖しか感じませんでしたが、ふと、ベトナムの交通はある意味強い信頼関係の上に成り立っているのではないかと考えるようになりました。車やバイクが、自分をよけてくれると信じて歩かなければならないからです。相手を信じていなければとても道路を横断することなどできません。それ以前は、ただベトナムの道路は渡りにくいとしか考えていませんでしたが、こう考えることで寛容になれたと思いました。



現地でのベトナム語の学習や、学生との交流も非常に有意義なものでした。相手の年齢や社会的地位によって呼称を使い分けるといったベトナム語の特徴は、上下関係を大切にするベトナムの文化が垣間見られ、実際にお世話になった先生には、どのように挨拶すべきなのかということを知りました。さらに、この学習を通して、日本語を使用している私たちも、知らず知らずのうちに相手によって、言葉遣いを変えているのだと再認識することができました。また、ベトナムで日本語を学ぶ学生たちの勉強のサポートもさせていただきました。写真は、日本語を勉強している学生さんたちの授業に実際にお邪魔させてもらったときの様子で、数人ずつのグループのなかに私たちが入って一緒に日本語を勉強しました。写真を見ても分かるように、みんながとても意欲的で、日本についてもっと知りたいという姿勢でした。そして何より、日本語を勉強することを楽しんでいました。特に学生さんたちが興味を持っていたのは、関西弁や京ことばといった方言で、何度も方言について質問をしてくれました。彼らの勉学に対する熱意は、日本の大学生のそれ以上だと率直に感じ、両国の学生同士で行われたプレゼンテーションでも、日本について深く知ろうという熱い思いがひしひしと伝わってきました。

このプログラムを通じて、もっと多くの異文化に触れたいと強く思うようになりました。現在は交換留学を考えていますが、その留学先も、これまで触れたことのない文化圏の国を選ぼうと考えています。将来の進路として、国際感覚の豊かさが求められる外交官を希望しているので、このプロジェクトで得た経験を基に、これからも様々な国を訪れたいと思います。



今回の2013年ベトナム・ハノイ国家大学サマースクールプログラムでは、ベトナム語・文化講座と現地の高校、大学での日本語の授業を受講し、実地研修を受けました。このプログラムを通して私が最も印象に残っていることは、高校、大学での日本語の授業に参加して、たくさんのベトナムの人々と交流できたことです。右の写真は授業後にベトナムの学生の皆さんと一緒に撮った写真です。どの授業でも温かく歓迎してくださり、ベトナム



の人々の優しさを感じました。日本語の授業では、難しい発音を何度も繰り返し練習し、授業後に私たちと話すことで実践力を伸ばそうとしている姿に感銘を受けました。私も彼らのように主体的に語学を学んでいきたいと強く思いました。授業後に現地の方々と実地研修や観光ができたことも、大変良い思い出です。日本とは比べものにならないほど多くのバイクが道路を走っているのを目の当たりにし、また、その場その場で歴史に関する話を聞くこともできました。工芸村では焼き物体験など、いろいろなことを教えてくれたり、手伝ってくれたりとベトナムの学生と一緒に過ごした日々は忘れられません。また、日越学生交流および発表討論が2度ありましたが、ベトナムの学生は私たち日本人の発表を熱心に聞いて、積極的に日本語で質問もしてくれました。私たちもベトナムの学生の発表を聞くことで、ベトナムの伝統的な人形劇や食文化について学ぶことができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。左下の写真は最終日の修了式の写真です。修了書を受け取ったとき、2週間という時間があったという間であったと感じるとともに、ベトナムに来ていろいろ学べてよかったという思いでいっぱいになりました。

私はこのプログラムを通して、ベトナムがとても好きになり、また、これからも様々な国に赴き、現地の人々とたくさん交流したいという思いがさらに強くなりました。日本で、座学で勉強することももちろん必要ですが、実際に行ってみないとわからないことはたくさんあると思います。そして、その国の人々との交流は、現地でしかできない貴重な経験です。今回のプログラムでも、出会った人々すべての笑顔が、私にとってかけがえのない宝物です。実際に海外に行って、日本の文化や考え方などを伝え、海外で現地の文化や考え方について学ぶ機会はとても大切だと思いました。海外のことについて考える時、日本について思いを馳せると、日本のことでも知らないことがたくさんあります。海外に行くことは自国について改めて客観的に考え、知る良いきっかけにもなります。今後もこのように海外で学ぶ機会があれば、積極的に参加し、できる限り多くの国を訪れ、深い教養と国際理解力をもって、一人の国際人として活躍していきたいと思えます。



ベトナムでは、毎朝にわたりの鳴き声で目が覚め、近くの屋台でフォー（麺）やバインミー（パン）を食べて1日の生活が始まります。日本ではあまり体験することのないベトナムでの経験を、しっかりと心の中にとどめ、今後の人生に活かしていきたいと思えます。

SEND サマースクールプログラムは平成 25 (2013) 年度から始まり、多くの方々のご支援の下、第 1 回目の派遣を無事終了することができました。本プログラムの実施にあたり、国際交流センターならびにアジア研究教育ユニットの先生方、また、同ユニットと留学生課の事務担当の職員の方々からは、多くのご教示を賜り、受け入れ大学の担当教職員各位からも、種々のご配慮とご教示を頂戴いたしました。この場をお借りして深謝申し上げます。また、人間・環境学研究科博士後期課程の北山聡佳さん、文学研究科修士課程の Nguyen Thi Ha Thuy さん、総合人間学部の糟野新一さんには、編集を始めとする様々な作業を補助していただきました。改めて、心より感謝申し上げます。

今年度における本プログラムの成果をより広く知っていただくため、実施報告書をまとめました。派遣学生たちは本プログラムの研修を通じて、相手国の文化を、そして日本の文化を学び合い、共有する課題の解決に向け、今回培った人間関係をさらに深めつつあります。本報告書が、学生派遣を考えておられる諸先生方の一助として、少しでもお役に立つことができれば幸いです。今後も本プログラムが皆さまに支えられて、より一層発展することを確信しています。

(佐々木幸喜)

SEND サマースクールプログラム  
(チュラロンコーン大学／ハノイ国家大学)  
2013 年度 (第 1 回) 実施報告書

---

平成 26 (2014) 年 3 月発行

編集 京都大学国際交流推進機構 国際交流センター／  
京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)

発行 京都大学国際交流推進機構 国際交流センター／  
京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)

〒 606-8501 京都市左京区吉田本町  
TEL 075-753-5678

---

印刷 株式会社 田中プリント  
TEL 075-343-0006





